

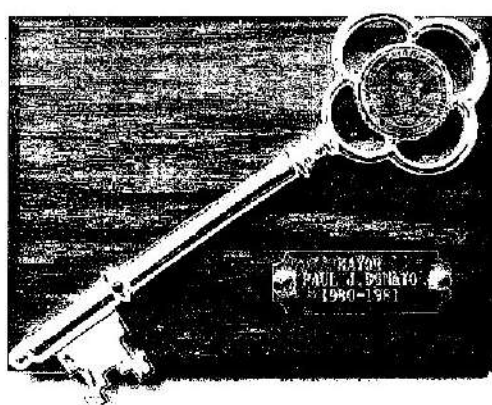
沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(100)

石原 昌家

ウクライナへのロシア軍 づつづつと。歴史上まきかと思つて
 の侵攻後、77年前、地上戦 閩下の沖縄住民を二重尊し
 にみえる映像を連日、テレ ぎとて、マサチューセツト
 ビが報じている(3月4日)が報じている(3月4日)。世界中の
 日。前回予告したテーマに みんなが、マサチ、マサチ
 入る前に、1990年度石 にとんでもないことが発生
 原ゼミナール機関誌「あし したのである。核戦争にま
 第11号(稲俣政彦、島袋利 での展開しなかっただけ
 律子編集)に私が執筆した も、幸いと思わないといけ
 エッセーを紹介したい。 ないのか。いや、いまでも人
 タイトルは「市の鍵 類史上類を見ないほどの環
 に思う」で以下の内容を つ



マサチューセツト州メドフォード市の「市の鍵」
 (種子島開発センター「鉄砲館」の坂島齊氏提供)

壊滅が戦争の結果現実
 進行しているのではない。
 この戦争のツケは、戦争の
 「勝利者」、「敗北者」
 構に降りかかってくるだけ
 でなく、この戦争に間知
 ていなかっただけの人々すべ
 災いをもたらすつつある。
 その意味では核戦争に類似
 しているといえよう。
 これで見ながら平和に対
 して無力感に陥ってはいけ

無戦世界①

憲法の平和主義を財産に

命こそ宝示す「市の鍵」

ない。それがいまや一番怖
 い。救いがある間は全
 力をあげて、地球を、人類
 を滅亡の淵から抜け出すこ
 とに務めなければならな
 い。では、いったいどうい
 う手段を持って生きていけ
 ば良いのだろうか。
 「命とう宝」の精神
 その回答をわれわれ「日
 本国民」は手の内に持つて

いる。すなわち、日本の憲
 法を世界中に「輸出」して
 世界中が日本国憲法の平和
 主義を共通の財産にしてい
 けば、人類は少なくとも戦
 争で滅びることはない。戦
 争放棄のこの精神は何も日
 本国憲法だけの特許ではな
 い。そのことを実感したのは
 1988年3月、種子島
 へ調査(釜淵系漁民の生活
 史)に行つた時のことであ

なる。その地の博物館を尋
 した時に次の資料が目につ
 ましたので、感銘をうけて
 メモをとつた。この機会に
 紹介したい。
 博物館には米国のマサチ
 ュセツト州から送られた
 「市の鍵」が展示されてお
 り(米国籍船が遭難したと
 き種子島住民が米国人を救
 出したお礼)。そこに説明
 が以下のよきよに記載して
 た。「何世紀も昔には後

なると、そしてもちろん危
 険に際した時には、都市は
 その門を閉め、鍵をかけた
 ものでした。重要な来客者
 を礼遇し、または進んでく
 る軍隊に降参するために、
 市の鍵を正式に贈呈するこ
 とは、訪問者や戦勝者に対
 し「我々に属するものはあ
 りなかつたの物です。…あな
 たがたに対して道を開けて
 います」と明らかに伝えた
 ものでした。市の鍵(を授
 けられること)は、メドフォ
 ード市によって個人に与え
 られる最高の栄誉の象徴と
 して受け入れられていま
 す。我々メドフォード市の
 市民全員は、皆様の将来の
 幸運と成功を、心の底から
 祈つております。ポール・
 J・ドナト市長」。核戦争
 の時代にあつては、このよ
 うな「贈り物」が「軟弱者」
 のように思える一負けるが
 勝ちの精神が、人類が
 戦争による破壊から救える
 道はないのではないかとお
 思います。

と、私は結んで来た。寧ろ
 眞諦論。自分の文を若干修
 正。今なら、沖縄の「命
 (ぬち)とう宝」の精神そ
 のものを表していると言
 いたはずだ。
 地球に住む資格
 沖縄戦争から32年も経つ
 ているいま、プーチン・ロ
 シア軍のウクライナ侵攻を
 映像でみていると、同じこ
 とを書かざるを得ないの
 1ド市によって個人に与え

あるのだろうかと思つて
 します。この文に対して89
 歳の横田雄一弁護士(東大
 在学中、砂川闘争を経験。
 2005年に沖縄国際大学
 大法院で私の受講生。長野
 県佐田(こま)に一日引い
 て、長期的展望のもと、他
 の手段(民主主義や平和主
 義による国力の充実)によ
 る軍事制覇主義との闘い
 の継続と究極的勝利を目指す
 こと。これが「命とう宝」
 の精神とも考えられま
 す」と的確に表現してい
 たのだ。
 さらに「難民となったウ
 クライナ女性が、今の世に
 こんなことで命を失うこと
 があっていいのか、と訴え
 る映像をテレビで見まし
 た。現下のウクライナ事態
 は私たちにどうして戦争の
 責任を改めて自らに課す契機
 となりました。ここから外
 れてはならないと思いま
 す」と続き、生き方を目標
 としている横田弁護士の高
 邁な志に接した。それはハ
 イで原出身の比嘉静枝校
 師が提唱した、いかなる戦
 争も否定する「無戦世界」
 (比嘉根崎夫妻が発端)に
 通底している。
 激戦下の産声
 連載の本題に戻るとし
 ても、テレビではロシア軍
 がウクライナの産科病棟を
 攻撃したと、備だたて妊
 婦が担架を運ばれていく緊
 迫した場面や、地下でまき
 に出産中の映像が映された
 れている(3月17日)。あり
 えなような場面をみてもや
 77年前、沖縄戦のさなか、
 生後まもない赤ちゃんを抱
 いたその祖母が顔面に直撃

弾を受けて即死し、血まみ
 れたつたであらう赤ん坊の
 姿が目に見えかねてきた。
 1945年5月15日、首
 里大名町から南へ避難途
 中、津嘉山の地下壕内で生
 まれた赤ん坊の両親は、前
 年の4月12日、米軍に撃沈
 された台中丸の奇跡の生存
 者だった。出産した地下壕
 は、日本軍部隊が使用する
 ので、立ち退かざるを得な
 かった。砲煙彈雨のなか、
 さらに閣下を避け、赤ん坊
 の両親と祖母や親戚の一
 行は糸満の名城裏落付近
 まで追いつめられた。米軍に
 取り囲まれ、捕虜にな
 ればなんとか生き延びられ
 ると思つた一行が、投降し
 ようと思を決し、行動を起
 こしたら、逃げ隠れしてい
 た日本兵らに「出ていった
 ら撃ち殺すぞ」と怒鳴られ
 元の場合へ引き返した。
 翌朝の6月16日、米軍の
 猛攻撃を受け、生後まもな
 い赤ん坊を抱いていた祖母
 が顔面に被弾し、即死した。
 日本兵の一団も即死した
 が、赤子は奇跡的に両親と
 もども無事だった。その赤
 子とは近所に住む遺縁の女
 性のことで、今もほぼ毎週
 元気な姿を見かけている。
 (次回15日掲載)